

梶山女学園大家政 ○加藤雪枝 梶山藤子

目的 被服における模様の形態と配色はそれらの調和によって大きな効果をもたらす。その効果を着装上より調べるため、幾何学模様として縞、抽象模様として直線および曲線によって自由に構成される模様、具象模様の花柄を選択し、そのワンピースのイメージにおよぼす模様の形態と2色配色の効果について検討した。縞についてはすでに報告した。今回は花柄を中心として速べ、他の模様と比較検討する。

方法 2種類の大きさの異なる花柄を半袖、衿なしのベージュワンピースに仕立て、1名のモデルに着用させた。カラーシミュレーターを用いて柄と地に基本12色のすべての2色配色を施し、また柄と地の配色を反転した場合のカラーライドを作成した。スクリーン上の映像を形容詞対を用いて評定し、因子分析によりそのイメージを求め、Eij型数量化法、MDA-UO法を用いて各イメージと配色との関係を分析した。

結果 花柄ワンピースのイメージは4因子であらわされる。大小花柄共にピンク、こい赤、あかるい黄、あさい青、あさい紫、しろ、くろの色のいずれの2色配色も美しい。調和、洗練されたイメージを与える。ブラウン、あさい紫、中間のグレイと他の色との配色はしとやかな、しぶいイメージであり、こいあおみの緑、ブラウン、くろとの配色は小さい花柄ではきついイメージを、大きい花柄ではこい赤がきついイメージを与える。あさい青、中間のグレイとの配色は冷たいイメージである。柄と地の配色を交換した場合、ピンク、こい赤、こい青にイメージの変化が生じた。直線・曲線で構成される模様についても花柄とはほぼ類似した傾向が得られた。しかし縞柄では相違が認められた。